



[トップ](#) [暮らしの情報](#) [文化・スポーツ](#) [生涯学習・社会教育](#)

ひので映画大使最新版

[2015年12月28日]

第66回映画大使「母と暮せば」

- ・ 期日 平成27年12月13日(日曜日) ※公開2日目!
- ・ 場所 イオンシネマ日の出

作品紹介

『おとうと』の山田洋次監督がメガホンをとった、初のヒューマン・ファンタジー・ドラマ。

母親・伸子役には『母べえ』でも主演を演じた吉永小百合が、息子・浩二役にはクリント・イーストウッド監督『硫黄島からの手紙』で海外からも高い評価を得た二宮和也が担当した。加えて、浩二の恋人・町子役には『小さいうち』で第64回ベルリン国際映画祭の最優秀女優賞(銀熊賞)を受賞した黒木華が、町子の新たな恋人・黒田役には『母べえ』にも出演した浅野忠信、伸子のことを気にかけている通称“上海のおじさん”役には、舞台を中心に精力的に活躍している加藤健一という、実力俳優陣が脇を固める。

戦後の広島を舞台にした父と娘の物語『父と暮せば』を手がけた井上ひさしが生前に構想していた長崎が舞台の物語というアイデアを、山田監督が受け継ぎ、原爆で死んだ息子と生き残った母が織りなす切なくも感動的な絆と希望の物語を、理想的で実力あるキャスティングで描き出す。

そして、音楽は、かねてから『男はつらいよ』のファンで、山田作品初参加となる、坂本龍一が担当し、物語に花を添えている。



(C) 2015「母と暮せば」製作委員会

映画大使の「感動と感想」をお伝えします。

このコーナーは、映画を見た感想や感動を、ストーリーは伏せて「みなさん」に紹介するコーナーです。

映画大使の「第一声！」

- ☆ 凄く泣けました！
- ☆ 最初から泣き通しでしたね！
- ☆ 山田監督らしさが出ていたと思いますね！
- ☆ 吉永さんが綺麗な人で、名女優だなと感じました！



今回参加された、映画大使の皆さんです！

映画大使の「映画のツボ！」

Aさん

とても楽しみにしていた映画でした。
山田監督らしさが出ていたと思い、心の温かさを感じました。
母を思う息子と、息子を思う母の気持ちが出ていた映画でしたね。

Bさん

エンドロールの最後に井上ひさしさんへの想いが書かれていて気になり、この映画がなぜ出来たのかを学んでみたいと思いましたね。
吉永小百合さんは、懂っていた女優さんなのでうまいなあ、と思いました。

Cさん

全体の表現方法が、直接的ではなくオブラートに包まれていたように感じました。
描写は綺麗にまとまっていたと思いましたね。

Dさん

吉永さんが綺麗な人で、名女優だなと感じました。
若い人に観てもらおうと心に残る作品になるのではないかと思いますね。
登場した人達の言葉使いがノスタルジックでしたね。

Eさん

戦争で人生を狂わされた人や、生き残った人が家族を亡くした人から嫉妬された事のエピソードを聞いて、戦争をしてはいけないと改めて思いましたね。
私も親を亡くしていますので、あんな風に死んだ人が出てきて、話せたら嬉しいなと思いました。

Fさん

親子の情愛の深さは、今も変わらないですが、あの時代の人間愛が凄く出ていたと思いましたね。珍しく凄く泣けました。
吉永さんの言葉が心に響きました。
とてもいい映画を観られて良かったです。
坂本龍一さんの音楽もとてもマッチしていましたね。

Gさん

この作品は、自分の父親が福岡生まれでしたので、もし、小倉に原爆が落ちていたらどうだったんだろうかという事など、自分自身に重ねるところがありましたね。
長崎に行って爆心地と長崎大学の医学部へ行き、そこで学生と先生が犠牲になった事の説明を聞いていたので、今回の映画がフィクションであっても、二宮君が演じていた浩二のような学生が沢山いたのだろうなと思いつつ観る事が出来ました。

Hさん

最初から泣き通しでした。メインの3人がせつなすぎて、結構どっしり泣きの壺にきて、今まで観た映画の中で一番泣けましたね。こんなに泣くとは思いませんでした。
死んだ息子が帰って来た時に、私にも同じ年頃の子供がいるので『うるっ』とききましたね。
淡々とした作品でしたが、心にずっしりきました。

作品の内容(印象に残ったシーンなど)

- ・戦争の悲惨さや、人生の捕らえ方は一つではありませんね。
- ・山田監督の脚本だけあって、吉永さんが演じる伸子が悲惨な中にもユーモラスな行動や会話がありましたね。
- ・音楽は印象に残らないくらい、そのシーンに合っていて、必要以上に主張してなくて良かったですね。
- ・若い俳優・女優の2人は戦後生まれだったので、いろいろな演技に苦労したと聞いていますが、とても演技がうまかったですね。

まとめ

戦後70年の今年『杉原千畝 スギハラチウネ』や『日本のいちばん長い日』などの公開がされており、この作品も長崎の原爆を取り上げているので、その一つになります。どの作品にも、戦争の悲惨さや、第2次世界大戦での敗北を風化させないための想いがこめられています。前回の映画大使の作品『杉原千畝 スギハラチウネ』の千畝の願いと、今回の「母と暮せば」の母、伸子の願いには、同様のものが多くあったと思います。

映画は、観る人の環境や、それまでの経験、その時の状況などにより、感じ方が違うものですが、この作品は特にその差が出やすい作品だと感じました。そのようになるのは、この作品が親子愛を中心に、戦争や恋愛などいろいろな要素を取り入れている事もありますが、監督の狙いだと思います。

また、この作品の登場人物は、母と息子を含め、主に5名と少ない中、いろいろな要素が盛り込まれているとはいえ、2時間を越える作品にもかかわらず、時間の長さを感じさせる事なく作られています。それは、山田監督のこの作品への想いの深さと、長年の経験によって生み出されていると感じます。

映画は是非、劇場の大スクリーンでご覧ください！

映画大使では、年代も性別も違う方達が、それぞれ意見を出し合いひとつの映画について話し合うという、日ごろできない経験をすることが出来ます。映画を観て自分がこう思っただけではなく、年齢や経験などの違う人の目線で観たことを聞くことにより、違った発見があるので、ひとつの映画が何倍にも広がって行きます。

今後も「ひので映画大使」にご期待ください！！

関連ページ

- [これまでのひので映画大使](#)
- [ひので映画大使のトップに戻る](#)

お問い合わせ

東京都 日の出町 文化スポーツ課 社会教育係
電話: 042-597-0511(内線541) ファクス: 042-597-6698
